

キリスト教紙芝居における福音的観点からの考察(2) —クリスマス物語を中心に—

尾 上 明 子
柴 田 智 世

1. はじめに

キリスト教保育に携わる者にとって、大きな行事であるクリスマス子どもとともにどのように過ごすかは、普遍的な課題と考える。クリスマスは、様々なアプローチで子どもたちに経験させることのできる大きな可能性を持っている。子どもたちに御子イエスの降誕を知らせ、心から共に降誕を喜ぶためには、様々なアプローチがあるが、文化財としての絵本や紙芝居も、そのひとつとして重要な教材であろう。しかしながら、筆者の経験からも、これらの文化財は、多くの場合、一つひとつ十分に吟味されることなく、忙しい行事を前に、とかく安易に扱われる傾向があるのではないだろうか。そのため、私たちは、昨年度は、「キリスト教紙芝居における福音的観点からの考察～新約聖書を中心に～」を行い、今回は引き続き、キリスト教紙芝居からクリスマス物語を取り上げた。クリスマス物語の先行研究として、筆者の一人は、「絵本にみるクリスマス～サンタクロースを中心として～」(1995年)、「絵本にみるクリスマス～降誕物語を中心に～」(1996年)を著し、幼児保育の文化財の重要なファクターである絵本を取り上げた。今回の研究は、これをベースにしたものである。

2. 方法

上記に述べたように、筆者の一人が含まれる先行研究をベースに行ったので、降誕物語そのものを言及するところは省略した。そのうえで、新約聖書の降誕を扱ったマタイによる福音書、ルカによる福音書から、それぞれの特徴を意識しつつ今回取り上げた紙芝居の特徴と合わせて考察し、紙芝居研究を進めた。先行研究の概略は、次のようになる。

【マタイによる福音書】

1、新共同訳聖書による見出し

イエス・キリストの誕生
占星術の学者たちが訪れる
エジプトに避難する
ヘロデ、子供を皆殺しにする
エジプトから帰国する

2、『マタイによる福音書』に含まれている固有のモチーフ

- ① 降誕物語の要所要所でヨセフが重要な役割を果たしている。ヨセフにも天使の告知があり、ヨセフは信仰によって神を信じ、マリアを受け入れる。また、夢のお告げで2回の決断をしている(ヘロデの兵士が追ってきた時、ヘロデが死にエジプトから、帰還する時)。
- ② ユダヤ人の王として生まれたイエスを、東方の学者たちが星に導かれてやってくる。
- ③ ヘロデと学者たちの違いが対比的に描かれている。ヘロデは、学者たちの前では、「行って私も拝もう」としているが、実際は、2歳以下の男子を殺した。学者たちの喜びとヘロデの不安と残忍さが際立っている。
- ④ クリスマスにプレゼントする習慣のルーツとなったとされるのが、学者たちの捧げもののお話である。イエスの誕生に最初に贈り物を贈った学者たちであるが、当時の高価な贈り物をなぜしたのか、どのような気持ちでしたのかが重要である。

【ルカによる福音書】

1、新共同訳聖書による見出し

洗礼者ヨハネの誕生、予告される

イエスの誕生が予告される
 マリア・エリザベトを訪ねる
 マリアの賛歌
 洗礼者ヨハネの誕生
 ザカリアの預言
 イエスの誕生
 羊飼いと天使
 神殿で献げられる

2、『ルカによる福音書』に含まれている固有のモチーフ

- ① 女性たちの角度から描かれている。マリア、エリサベト、預言者アンナが登場している。特に、聖書にはマリアは、「これらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らした」とあるなど女性たちが重要な役割を果たしている。
- ② 天使から羊飼いにへみ告げが伝えられた。当時の社会の底辺に存在したといわれる羊飼いに福音が伝えられたということが注目に値する出来事であった。み子の誕生を知った羊飼いは、その後、スポークスマンの役割を担っている。
- ③ 神殿にイエスが献げられたときのシメオンの預言は、イエスの生涯にかかわることであり、意味深い。

【いわゆる降誕物語】

- ① 【いわゆる降誕物語】は、単にマタイとルカを合わせて語られているというものではなく、二つの物語から想像した要素がいくつもある。その一つがマリアがロバに乗ってベツレヘムに旅する姿である。ロバが使われたということは、聖書に書かれていない。
- ② 宿探しのモチーフは、「宿屋には彼らの泊まる場所がなかった」と記されているところからきている。
- ③ イエスが馬小屋、もしくは家畜小屋で生まれたことは、全く聖書には記されていない。ただ、イエスが飼葉おけに寝かせられたと

あるところから、馬小屋（家畜）説が誕生したのであろう。

- ④ ヨセフとマリアが泊った晩にイエスが誕生したように描かれているのが、ほとんどであるが、聖書にはそのように書かれていない。
- ⑤ 学者たちは、3人となっている絵本や紙芝居がほとんどであるが、聖書には、学者たちが複数であったことと、贈り物が3つであることしか書かれていない。また、らくだに乗ってとも記されていない。
- ⑥ 一般的に絵本や聖書物語、紙芝居などでは、羊飼いが先で学者たちは、最後とされているが、どちらが先かは不明である。
- ⑦ 動物たちがイエスの誕生を目撃した、立ち合ったということは、聖書には言及されていない。

3. 結果

(1) リスト作成にあたって

降誕物語を扱った紙芝居のリスト作成にあたり、先行研究（尾上、菊地、1996年）を参考に、聖書の記述に従って行った。今回の研究では、「プロローグ」と「エピローグ」、「その他」の項目を加えている。

話を1～22の項目に分け、各項目について紙芝居中に記述がある場合は、紙芝居の場面番号を①、②、③…と記載した。空欄は、記述がないことを示している。このようにして出来上がったものが表1である。

(2) リストから見る全体的考察

まず、リストから全体的な考察を行いたい。クリスマス物語は、『マタイによる福音書』と『ルカによる福音書』をそれぞれベースにしているものと、これら二つを合わせてベースにした「いわゆる降誕物語」に分類し、リストの項目別に見ると次の通りである。（ ）内の数字は、表1の分類番号1～13を示す。

- [1. プロローグ] は、2作品（→2、5）を除く11作品で扱われている。
- [2. ヨハネの誕生予告] は、1作品のみ（→4）に記述がある。
- [3. イエスの誕生予告] は8作品で扱われている。（→4、7、8、9、10、11、12、13）

表 1 紙芝居リスト

分類番号	作品名		項目	出版年		作(文/絵など)	出版年	出版社
	L (ルカ)	M (マタイ)						
1	プロローグ							
2	ヨハネの誕生予告	L						
3	イエスの誕生予告	L						
4	ヨセフの苦悩とみ告げ	M						
5	エリサベトを訪問するマリア	L						
6	ヨセフ、マリアを迎え入れる	M						
7	人口調査の命令とベツレヘムへの旅	L						
8	宿営がし							
9	イエスの誕生	M・L						
10	み告げを受ける羊飼い	L						
11	ベツレヘムに向かう羊飼い	L						
12	羊飼いたちの礼拝	L						
13	み告げを語る羊飼い	L						
14	神殿で捧げる(シメオンとアンナ)	L						
15	星を調べる学者たち	L						
16	占星術の学者エルサレムへ	M						
17	ヘロデ王と謁見する学者たち	M						
18	星に導かれベツレヘムへ	M						
19	占星術の学者たちの礼拝	M						
20	ヘロデの幼児殺し	M						
21	エピローグ							
22	その他							
1	かいばおけのおうさま		①			飯 光(文) 藤本四郎(絵)	1996年	キリスト教 視聴覚センター
2	ほしとはかせさん					中島善子(文) 石橋えり子(絵)	1997年	キリスト教 視聴覚センター
3	ほしとはかせたち		①			園木公譚(監修) 加藤代々子(文) 宇崎幸子(絵)	不明	ライフ企画
4	おことばとおりに		①			澤谷由美子(文) 金斗敏(絵)	1993年	キリスト教 視聴覚センター
5	ひつじかいのクリスマス					飯 光(文) 伊藤裕司(絵)	1995年	キリスト教 視聴覚センター
6	ひつじかいのクリスマス		①②			園木公譚(監修) 小川寛子(文) 宇崎幸子(絵)	不明	ライフ企画
7	クリスマス		①			高田彰(文) 宇崎幸子(絵)	1966年	基督教 視聴覚センター
8	クリスマスってなあに		①			久山伸児(文) 矢野滋子(絵)	1975年	キリスト教 視聴覚センター
9	教い主がお生まれになった		①			廣瀬和子(文) 芝美千世(絵)	1985年	キリスト教 視聴覚センター
10	メリークリスマスってなんのこと		①			池上摩里子(脚本) 若山憲(画)	1990年	童心社
11	クリスマスものがたり		①			澤谷由美子(文) ひぐちけいこ(絵)	1998年	キリスト教 視聴覚センター
12	クリスマスのできごと		①			宮崎光(文) まきくちぶら(絵)	2005年	キリスト教 視聴覚センター
13	イエスさまのお生まれ		①			大越 結実(文) ゆーちえみこ(絵)	不明	いのちのこはば社

- [4. ヨセフの苦悩とみ告げ] は5作品で記述されている。(→9、10、11、12、13)
- [5. マリア、エリサベトの所への訪問] は1作品のみ(→4)であるが、紙面を潤沢に使い、5場面にわたって描かれていることが特徴的である。
- [6. ヨセフ、マリアを迎え入れる] は2作品で扱われている。(→11、12)
- [7. 人口調査の命令とベツレヘムへの旅] は8作品で扱われている。(→5、7、8、9、10、11、12、13)
- [8. 宿さがし] 8作品で扱われており、(→5、7、8、9、10、11、12、13) 2場面にわたって描かれているものが4作品、3場面にわたっているものも1作品ある。宿探しの部分は聖書においては明記されていないが、作品のファンタジーをより豊かにする役を担っていると思われる。
- [9. イエスの誕生] 全13作品で扱われている。(→1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、11、12、13) 言うまでもなく、クリスマスはイエスの降誕が本質であるため、紙芝居にこの点を取り上げられることは当然のことである。
- [10. み告げを受ける羊飼] 9作品で扱われており(→5、6、7、8、9、10、11、12、13)、複数の紙面を使って描いているものが5作品ある。
- [11. ベツレヘムに向かう羊飼] 6作品で扱われている。(→5、6、7、9、10、13)
- [12. 羊飼たちの礼拝] 10作品で扱われている。(→1、5、6、7、8、9、10、11、12、13)
- [13. み告げを語る羊飼] 5作品で扱われている。(→5、6、8、9、10)
- [14. 神殿で捧げる(シメオンとアンナ)] 1作品のみ(→13)
- [15. 星を調べる学者たち] 7作品で扱われている。(→2、3、7、8、9、10)
- [16. 占星術の学者エルサレムへ] 4作品で扱われている。(→2、3、7、13)
- [17. ヘロデ王と謁見する学者たち] 2作品で扱われている。(→2、3)
- [18. 星に導かれベツレヘムへ] 6作品で扱われている。(→1、2、3、8、9、10)

- [19. 占星術の学者たちの礼拝] 10作品で扱われている。(→1、2、3、7、8、9、10、11、12、13)
- [20. ヘロデの幼児殺し] 1作品のみである。(→2)
- [21. エピローグ] 8作品で記述がある。(→1、2、3、5、6、9、11、12)

(3) 各作品の特徴の分析と考察

[マタイによる福音書より3作品]

①「かいばおけのおうさま」1996年、聖書箇所〈マタイ2:1~12〉



絵は、水彩画で大変温かみがあり、読み手である子どもに優しさや安心感が伝わるような描き方である。

主人公は小ロバのトトである。そのほかの登場人物は、マリア、ヨセフ、イエス、宿屋、学者たちである。(この作品では、博士ではなく、学者と表記されている)そして、動物であるロバ、ラクダ、ニワトリ、ヒヨコ、ネズミが登場する。

物語は、マリアとヨセフが急にロバの小屋に泊まることになったところから始まっている。その後、イエスが生まれたことを聞いたトトが大変喜び、赤ちゃんに会いたくて、ネズミと一緒にイエスの寝ている小屋まで出かけていく。他には誰もいない時間を選んで、小屋に入るシーンは、紙芝居の読み手である子どもたちに、期待感を与えると思われる。

イエスの姿を見たトトとネズミの喜びあふれる感動が、よく描かれている。2匹は、イエスへのプレゼントを持ってこなかったことに焦りを表すが、ネズミが、心からおめでとうの言葉言うことで、それを贈り物にしようと提案する。これは、

この後に叙述する、ケースの「解説」欄に書かれているように、読み手の子どもたちが、物としての贈り物にとらわれるのではなく、心を神様にささげることの示唆と考えられる。

ケースに目標、解説が書かれている。内容は、ひとり子をこの世に送って下さった神の愛に応える者となる、という趣旨である。「解説」には、読み手の導きとなるポイントが示されている。1点目は、本作品は聖書箇所(マタイによる福音書第2章1節-12節)を元にしていて、聖書に書かれている物語ではないという断り書きがある。2点目は、世界の救い主として生まれた方は、子どもを愛している方であり、読み手が主イエスに出会い、心に迎える喜びを伝えてほしいとの旨が書かれている。3点目は、作品中の学者たちは黄金・没薬・乳香を捧げ物としているが、捧げ物は「物」だけではないこと、神様の愛に応じて、子ども達が自分の生活を通してどのような捧げ物ができるかを話し合うことを勧めている。

②「ほしとはかせさん」1997年、聖書箇所〈マタイ2:1~12〉



絵はアニメのような描き方であり、単調さを感じるが、子どもにはこのような絵も受け入れやすいのではないかと推測される。

タイトル通り、博士に焦点を当てて描かれている。星の動きを調べていた三人の博士たちが、大きく輝く星を見つけ、救い主に会いたい一心で、遠方を旅する姿が詳細に描かれている。博士たちがヘロデ王に接見する場面では、ヘロデ王の表情から彼の狡猾な思惑がよく伝わる。

ケースには目標と解説が書かれている。内容は、

救い主イエスを拝みに来たのは、ユダヤ人ではなく、東の国から旅してきた星の博士である、という趣旨である。

ケースの「解説」欄には、今現在のこの世界が、「夜明け前の闇夜のように、未だ地上は目をおおいたくなる出来事であふれている」ことに触れ、そのような中、救い主が誕生し、神の光は私たちが闇の中にいても明るく照らし続けることの希望へと招かれていると書かれている。

③「ほしとはかせたち」出版年不明(記述なし)、聖書箇所〈マタイ2:1~12〉



先の作品(「ほしとはかせさん」1997年)とタイトルがほぼ似ており、博士に焦点が当てられている。

三人の博士たちが救い主に会うために旅をするというストーリーである。

ヘロデ王が悪人を想像させる人物としては描かれていない。しかし、博士たちがヘロデ王の宮殿に着いた時、入り口に「強そうな顔をした兵隊たちが、門の番をしていました。」と本文中にある。このことは、読み手である子どもたちに、宮殿の中にいるヘロデ王の性格や心の内を想像させる余地を残しているのではないと思われる。

絵は、各場面ごとをよく捉えて、状況がよく伝わる描かれ方である。

ケースには、目的、解説、使い方が書かれている。「目的」は、イエス・キリストは全ての人類のために救い主として誕生したことを知らせると書かれている。

「解説」には、三人の博士たちが星に導かれて旅をしたことが作品中に書かれているが、「みこ

とばに導かれた旅」であったと解してもよいと書かれている。また、伝説によると、三人の年齢は青年、壮年、老年であったとも言われており、このことは、キリストは年齢を超えた全ての人のために誕生したことを証明していると解釈できると記述されている。

[ルカによる福音書より 3 作品]

①「おことばどおりに」 1993年、聖書箇所
〈ルカ1：5～56〉



女性である、マリアとエリサベトに焦点を置いて描かれており、2人の性格や生活の様子についても触れられている。神の言葉を受けたエリサベトは、自身と同様の体験をしたマリアを心から祝福する。マリアは感謝にあふれて神に讃美し、後にイエスを生んだというところで話が結末を迎える。

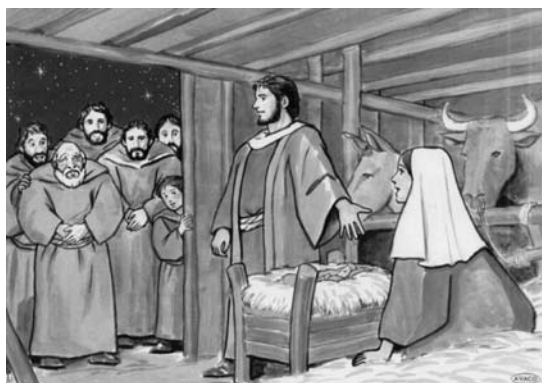
マリアに対するイエスの誕生予告に3場面、マリアがエリサベトのところに相談に出かける場面に、5場面が費やされている。このことから、この作品がこれらの場面に重きを置いていると言えよう。

なお、羊飼いにイエスの降誕を知らせるお告げが届いたことについては、全く触れられていない。

ケースに「目標」や「解説」、「使い方」が書かれている。「目標」は、マリアやエリサベトの信仰を学ぶという趣旨である。紙芝居の内容も、エリサベトとマリアを中心的に取り上げ、神のお告げを2人が信仰をもって受け入れるというストーリーである。「解説」として、部分的な説明が加えられていることは、読み手の導きになるであろう。「使い方」では、本文中のマリアの賛歌の言

葉は聖書（共同訳）通りに載せたこと、それらの言葉は子どもにとって難しいため、質問する子どもがいたら答えるようにとの記述がある。「使い方」では、この作品を私たちの生活に適用していくための方向性が書かれている。内容を抜粋すると、私たちが生活の中に困難があっても、マリアのように「おことばどおりになりますように」と祈り、主のみ心を受け入れていけるように話し合うことの勧めや、待降節は主の約束を信じて過ごすことを推奨している。

②「ひつじかいのクリスマス」1995年、聖書箇所
〈ルカ2：1～20〉



絵が、当時のユダヤの国の様子や人々の暮らしを適切に表現している。

物語の1場面では、皇帝アウグストウスの使いが、慌ただしく馬に乗ってナザレの村に来て、全ての人々が住民登録をするようにとの知らせを告げる。話の冒頭から物々しい雰囲気を醸し出しているところが特徴的である。しかし、2場面からは話の雰囲気が変わり、マリアとヨセフがベツレヘム行きに向けて相談する流れになり、最後の場面まで話は穏やかに進んでいく。

羊飼いの中に、子どもの羊飼いが描かれていることが特徴的である。読み手である子ども達にとっては、話に入り込みやすいであろう。

夜中に羊飼いが交代で睡眠をとりながら番をしていると、天使が現れ、救い主が生まれたという知らせを受ける。天使が去った直後に、羊飼いたちは喜び勇んでベツレヘムにそれを見に行こうと話している絵が、彼らの大きな喜びを表現していると思われる。このような羊飼いから始まっ

た喜びの波紋が、今、現在にも及んでいることを子ども達に十分に伝えるようにと、ケースの「解説」に書かれている。

ケースには目標が書かれている。内容は、イエスは私たちの救い主としてこの世に生まれて来て下さったという趣旨である。このことは、イエスの降誕を祝うクリスマスが、単に年中行事のイベントとして扱われるのではないということである。そして、聖書の福音に基づき、神の子イエスを私たちに与えて下さったという愛と恵みを知ることが、クリスマスが一番の目的であることを意味していると思われる。

③「ひつじかいのクリスマス」出版年不明(記述なし)、聖書箇所〈ルカ2:8~20〉



主人公の羊飼(名前はルカちゃん)は、子どもである。セリフも主人公が多い。

先の②の作品と同じタイトルだが、話の内容やイラストは全く異なっている。イラストは、素朴な中にも子どもの純粹さや、登場人物への親近感を読み手が感じとることができる。影絵のような描き方の工夫もされている。

ルカちゃんは救い主が生まれた知らせを受けて、仲間の羊飼とともに救い主を見に出かける。その時に自分の子羊をしっかりと抱いて連れて行く姿が描かれている。まるで、幼子が出かける際に人形などの好きな玩具を持って行く特性を描いているようであり、この紙芝居を見ている子ども達は、ルカちゃんに親近感をもつであろう。この点について、ケースの「使い方」に『こどもの心の世界は、こどもの気持ちになって考えてみないと理解しにくいものです』と叙述されている。こ

れは、読み手である子ども達が、作品中の羊飼であるルカちゃんの理解者になることを願って描かれたと推察することができる。

【いわゆる降誕物語より7作品】

①「クリスマス」1966年、聖書箇所〈マタイ2:1~11、ルカ1:26~38、2:1~16〉



絵はシンプルで黒の縁取りが部分的にあることによって、明快な印象である。ケースの表には解説がある。ここには、まずクリスマスが偶発的に起こった出来事ではなく、旧約からの神の偉大なみ業であることを読み手が十分に心にとめて使用することが大切であることが述べられている。また、対象によって、言葉を添えたり、あるいは、内容そのものを追加したり、アドベント期間に使用したりと様々な工夫が書かれており、参考にするとう有効である。

表1にもあるように、本紙芝居は人口調査の命によって旅に出るところから、宿探し、誕生、羊飼いたちの礼拝まで一連となっており、場面を多く使用していることが分かる。このことにより、ヨセフとマリアの苦勞の末、み子が誕生したことが強調されていると思われる。

②「クリスマスってなあに」1975年、聖書箇所〈マタイ1:18~2:12、ルカ1:26~2:20〉

絵は、クレヨンと水彩で温かく力強く描かれている。ケースにある目標には、神の恵みの賜物としてのイエス・キリストの降誕が、すべての人の喜びと希望であることを知るとともに、神の恵みにこたえて、愛の交わりを育てる、とある。また、解説には、クリスマスが習慣となり、年中行



事の一つとして惰性的になりやすいことに注意を喚起している。プロローグとして、兄弟がどうして、クリスマスにプレゼントがもらえるのかという質問をし、それに母親が父親に依頼し、父親が語るという形で『いわゆる降誕物語』が始まり、最後に家族でクリスマスについて話し合うことによって締め括られている。目標と照らし合わせて、父母の言葉がやや教訓的なニュアンスを感じるが、ここは、使用する者が子どもたちと共に考えるチャンスとして有効に用いるとクリスマスの意味が深まるであろう。

③「救い主がお生まれになった」1985年、聖書箇所〈マタイ1:18～2:11、ルカ1:26～2:20、(ヨハネ3:16)〉



絵は、水彩によって丁寧に描かれている。ケースには、解説と使い方が掲載されている。本体には、目標が次のように記されている。「貧しい馬小屋でお生まれになったイエス・キリストは、すべての人の救い主として、神がくださった最も大きな恵みであることを知り、神の愛にこたえて愛の心を持つものとなる。」しかし、この目標は、子どもにとって非常に抽象的であるので、使用す

る側は、一つひとつの出来事を何度も繰り返し、クリスマスの深い意味をともに考え、味わえるように導くことが重要であると思われる。

④「メリークリスマスってなんのこと」1990年、聖書箇所〈マタイとルカに基づくとのみ記述〉



絵は、非常にシンプルな線で、色彩も、表紙を除いて全体に淡い色調であるが、黒の縁取りがあり、紙芝居の絵として遠くからもはっきりと分かるように描かれている。まず、表紙は、クリスマスを象徴するツリーがはっきりとした色彩で描かれ、クリスマスがサンタクロースの来る日なのか、プレゼントをもらう日なのかと聞き手に問いかけ、イエスが生まれた日ということを伝えるところから始まっている。二枚目からは、マリアへの受胎告知、ヨセフへの天使の告知、宿探し、誕生、羊飼いの天使の告知、羊飼いがベツレヘムへみ子を探す、羊飼いの礼拝、博士たちの来訪、博士たちの礼拝、最後にもう一度ツリーの絵があり、イエスさまのおたんじょうをお祝いする日であると締めくくられている。使用方法が、ケースに書かれているが、主に紙芝居の演じ方が丁寧に書かれており、内容についての記述はない。

⑤「クリスマスものがたり」1998年、聖書箇所〈マタイ1:18～2:12、ルカ1:26～38、2:1～20〉

絵は、クレパスと水彩でやわらかい色調で描かれている。ケースに、目標、解説、使い方があり、目標は、「救い主イエスの誕生は、神が世界の人びとにくださった最高のプレゼントであることを伝える。」とある。また、解説には、救い主の誕



生が不思議な方法で、マリアやヨセフ、羊飼いに知らされ、博士は、星に導かれイエスと会ったことから、クリスマスの出来事が神のみ心であったことを伝える、とあり強調点がよく分かる。特に最後の場面で、マリアとヨセフが不思議な出来事を回想しながら話し合い、神のみ心であったことを悟る場面は、当然あったと予想されるが、紙芝居として他に取り上げられていない点、新鮮である。

⑥「クリスマスのできごと」2005年、聖書箇所
〈マタイ1:18～25、2:1～12、ルカ1:26～38、2:1～7、2:8～20〉



絵は、茶色の色調で美しいが一部漫画のような表現(ヨセフの目が渦巻き状)がある。ケースには、目標、解説、聖書本文との整合性に関して、使い方が掲載されている。目標には、イエス・キリストの誕生によって、新しい救いの歴史が始まったことを思い起こし、自らの使命を自覚した神の子イエスの生涯全体へと思いを広げていく、とあ

る。そのため、プロローグとエピローグには、イエスが母マリアに出生の出来事を話して欲しいと頼み、最後は、母親に感謝の言葉を表し、余韻を感じさせる閉じ方がなされている。羊飼いや、博士がほぼ同時に馬小屋に着き、その両者が不思議な方法でみ子の誕生を知り得たことを回想として語り、マリアが一連の不思議な出来事を心にとめ、イエスが大きくなったら話そうとの前触れがある。これは、聖書に忠実であり、作者のファンタジーによって、膨らませることができるところである。このような手法は、大変ユニークであると言える。解説にあるように、聖書を再解釈し、聖劇の要素を取り入れビジュアル的に親しみ易くしたということである。CD(楽譜)が付き、歌も入っていることも特徴である。従って、作品の意図通り使用しようとする場合、より演劇的になることから、丁寧な準備が必要となる。

⑦「イエスさまのお生まれ」出版年不明(記述なし)、聖書箇所〈マタイ1,2章、ルカ1,2章〉



絵は、水彩の明るく軽いタッチで描かれており、背景などの情景がよく分かる描き方である。ケースには、目標、解説が掲載されている。目標は、クリスマスが、「キリストの礼拝」という意味と「信じる者は、永遠のいのちをいただき、全人類に与えられた神の最高の贈り物がイエスであることから、心からの感謝を持ってお祝いしよう」と書かれている。

文章は、聖書に忠実でありつつ、マリア、羊飼いや、占星術の学者などの信仰、喜び、感激の気持ちが場面を多く用いることによって、よく現されてい

る。今回取り上げた7作品において、唯一この作品のみ、マリアのエリサベト訪問が取り入れられている。しかし、エリサベトも身ごもっていることの記述はない。解説には、旧約に登場する預言者イザヤとミカの通り、成就されたとある。そして、イエス・キリストによって、神の救いの計画が完全なものとなったとしている。

(4) 作品の全体的考察

①「マタイによる福音書」の特徴

1) ヨセフが重要な役割を果たしているという点である。マタイ1:19「夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。」からは、ヨセフの親切さを意味することが伺うことができる¹⁾。

「クリスマスものがたり」(→11)では、ヨセフがマリアと結婚するか否かで、一人で苦悩する場面と、その夜、ヨセフが眠っていると夢の中に天使が現れて、生まれてくる子どもは神の子であるから結婚するようにと言葉を信じる場面がそれぞれ描かれている。2場面にわたって、ヨセフをクローズアップする作品は、本作品のみである。いかにヨセフが悩んだかが、読み手に伝わる。

「クリスマスのできごと」(→12)においても、ヨセフが同様に悩む姿が描かれている。夜中にひとり頭を抱える絵は、インパクトがある。私見であるが、ヨセフが悩んでいる目が渦巻き状に描写されたマンガ的な印象は、全体の調和を崩しているように感じられ残念に思う。

このように、ヨセフの経験に焦点を当てて語られており、マリアの経験については語っていないという点が特徴的である²⁾。また、天使の使信についても、マタイによる福音書ではヨセフに、ルカによる福音書ではマリアに向けられている³⁾。

2) 東方の博士たちがヘロデ王に來訪することについて書かれている点である。東方の博士たちがエルサレムにやってくる、ユダヤ人の王が生まれたことを伝え、ヘロデ王は恐れ惑う。(マタイ2:2-3) そこでヘロデ王は、祭司長たち、学者たちをみな集めて、キリストの生まれる場所を問いただすことから、彼はイエスの誕生を拒絶していることが分かる。あわせて、「ベツレヘムと

その周辺一帯にいた2歳以下の男の子を、一人残らず殺させた。」(マタイ2:16)からも、ヘロデの不安と、エルサレムの人々のヘロデに対する恐れが想像される。

3) 東方の博士たちが、生まれたイエスに黄金、没薬、乳香を贈り物として捧げた点である。これらの三種類の贈り物は、大変高価であり王にふさわしいとされている。博士たちが幼子イエスに敬意を表したことに、彼らの希望を見出すことができる。

「ほしとはかせさん」(→2)では、一人の若い博士が星を調べるシーンから始まり、次に他2名の博士たちと共に星の動きについて議論する場面については、3場面にわたって詳細に描かれている。作品中の台詞も、大部分が博士たちのものである。

「ほしとはかせたち」(→3)においては、表紙(1場面)を除く残りの11場面全てに、博士の絵が描かれている。台詞は、ヘロデ王の言葉が1箇所あるのみで、あとは全て博士たちの会話であることは、この作品の特徴を表していると思われる。先に述べた「ほしとはかせさん」(→2)の博士たちはアニメ調の絵であるため、躍動感のある博士たちという印象があるが、本作品「ほしとはかせたち」は、本文の叙述の仕方から、落ち着いた冷静な博士たちという印象が伝わる。

また、一方で贈り物を捧げたことは、今日私たちがクリスマスにプレゼントを贈る習慣の根源の一因として考えられることが分かる。しかしながら、私たちは物質的な価値に心を奪われない方がよい。これらの贈り物は、博士たちのイエスに対する信仰心の現れであると考えられることから、贈り物とともに、心を捧げたと見えよう。また、博士たちの來訪については、マタイの福音書のみに記載されていることも特徴である。

②「ルカによる福音書」の特徴

1) 先行研究(尾上・菊地、1996年)で述べられているように、ここで出てくる人物であるマリア、エリサベト、女預言者アンナのように女性の存在に焦点を当てて描かれている点である。

中心人物であるマリアは、性格がどうなのか、家柄は何か等⁴⁾、彼女の人となりに触れる記述は

ない。ヨセフについては、「ダビデの家系」(マタイ1:16、ルカ1:27、ルカ2:4)であるとの書かれていることと対照的である。マリアについて知るために特に重要な点は、彼女の性格等よりも、「神があなたと共におられる」という中心的な事実である⁵⁾。「おことばどおりに」(→4)では、エリサベトと夫のザカリアの間に子どもが授かる場面に3場面が費やされている。マリアのところに天使が現れて救い主の誕生を告げる場面、それを知って不安に苛まれる場面、天使のお告げに従うことを決意する場面と、マリアに焦点が当たり、物語は続いていく。その後、マリアがエリサベトのもとを訪問し、二人が喜び合う姿が生き生きと描かれている。

「クリスマスものがたり」(→11)では、最初の場面からマリアが大きく描かれ、天使からのみ告げを受ける場面へと話が continuing している。

「クリスマスのできごと」(→12)では、マリアが少年であるイエスに「お母さん、ぼくの生まれたときのこと教えてくれる?」と頼まれて、それらの話を語っていくという独特なスタイルをとっていることから、本作品はマリアの語りで構成されていると読み取ることができる。

2) イエスの誕生が、まず先に羊飼いに届いたという点である。当時は、羊飼いの地位ほど軽蔑されているものはないと言われたほど、低い身分であった。いうなれば、イエスの誕生は身分や地位に関係なく、全ての人々に喜びをもたらす良い知らせであると言えよう。「ひつじかいのクリスマス」(→6)では、羊飼いの仕事の様子や、羊の生活ぶりについて子どもに分かり易い文章で記述されている。全12場面全てに、羊飼いの姿が描かれていることが、大変特徴的である。タイトル通り、羊飼いにかなり焦点を絞って描かれている。

3) イエスの誕生後8日目満ちた時、イエスが神殿で捧げられたことについて、ルカによる福音書に記述があるが、今回分析した紙芝居でその場面が描かれていたのは、1作品「イエスさまのお生まれ」(→13)のみである。

4) 聖書の話には忠実でありながらも、豊かなファンタジーを使って述べられている作品が見られた。具体的には、子どもや動物たちの立場から描かれた次の作品である。

「ひつじかいのクリスマス」(→5)、「ひつじかいのクリスマス」(→6)の2作品は、子どもの立場から描かれている。「ひつじかいのクリスマス」(→5)では、大人の羊飼いの他に、2人の男の子が登場する。生まれたイエスを礼拝する際に、男の子は贈り物を捧げている。

「かいばおけのおうさま」(→1)では、主人公が小口バのトトであり、ラクダやニワトリなど様々な動物たちが描かれている。イエスは、小さく弱い立場の象徴とも言える子どもや動物を愛した。その子どもたちや動物がクリスマスの祝福に預かるというこれらの紙芝居のストーリーから、作者たちの温かいまなざしが伝わる。

以上、子どもや動物の立場から見た作品を挙げた。子どもと動物の両者に共通することは、何の疑いもない純粋な心であり、救い主の誕生を心から待ち望む心の持ち主が、イエスの誕生に出遭うという点であろう。読み手である子どもたちにとっても、イエスの誕生の喜びを自分も追体験するという希望を与えていると言える。

4. まとめと今後の課題

今回の作品は、紙芝居という枚数が限られている教材上の性質もあり、各作品はクリスマスの話を聖書の叙述にほぼ従って描かれていた。中でも、各々の作品が意図的に詳しく取り上げたいという部分については、複数の場面にわたっての記述も多く見られた。紙芝居は、1場面にと一つのシーンのみが描かれるため、読み手には、場面ごとの印象が強く感じられると同時に、子どもがその絵の中にあたかも自分が入り込んでいるかのような感覚を受けるだろう。そのような紙芝居の特性を生かして、R・シントラーが述べているように、「子どもが物語を聞くと、この出来事は自分自身と何か関係があると気づく」⁶⁾ことは重要である。同時に、シントラーが危惧している「子どもたちにとってクリスマスを、貧しい幼な子についての遠くの牧歌的な物語にしてしまわないようにしなければならない」⁷⁾ことも、読み手に求められるであろう。

また、シントラーは、プレゼントや街の商店街の華々しさ、にぎやかさと、聖書の降誕物語が語る飼いやおけの中に眠る子どもの貧しさとは、ク

リスマスが両者の対立を含む祭りである⁸⁾と指摘していることも、興味深い。

今回分析した13作品全てが、イエスの誕生をもって話が締め括られているが、次のようなシントラの記述も、読み手にとっての知識としては示唆を与えるものである。「イエスが死んですでに数十年が経って初めて、誕生の物語が記述されました。イエスの生涯の初めが最初のキリスト教徒にとって重要となったのです。しかし、それは興奮を呼ぶような初めであったということではなく、この人の働きと教え、ことにイエスの死の克服が最初の教会の生活と考えを支配していたからです。その際に、イエスの復活が中心にありました。誕生はこの復活へと至る生涯の出発点として重要となったのです。この生涯が復活へとつながっていくこと、そしてこの生涯が神の道を示すことのためにだけ、その始まりも物語る価値を持つものとなったといえます」⁹⁾

多くの幼稚園や保育所、子ども園では時期になるとクリスマスの行事を行う。その際に、キリスト教主義の園であるか否かにかかわらず、クリスマスの本来の意味について触れることは、子どもに物事の真実を伝える観点からも意義深いと考える。その上で、キリスト教主義の園には、クリスマスを待ち望むアドベントの時期を大切にするとともに、福音を宣べ伝える使命としても、これらの紙芝居が有効に用いられることが望ましい。なぜなら、この時期は園ではクリスマスを控えて、行事の準備期間として紙芝居が表面的に用いられやすいためである。

本研究では、紙芝居の作品の分析が中心であり、これらを保育そのものに用いることについては触れることはできなかった。この点は今後の課題である。紙芝居を演じる上での読み手側の気持ちや、

クリスマス話に向き合う姿勢が直接子どもに伝わるため、事前の教材研究や子どもへの提供の仕方が問われることになると思われる。

<引用文献>

- 1) E. シュバイツァー著、佐竹 明訳『NTD 新約聖書註解マタイによる福音書』NTD新約聖書註解刊行会、p.26、1978
- 2) R・T・フランス著、山口 昇訳『ティンデル聖書註解マタイの福音書』いのちのことば社、p.91、2011
- 3) E. シュバイツァー著、佐竹 明訳『NTD 新約聖書註解マタイによる福音書』NTD新約聖書註解刊行会、p.29、1978
- 4) 蓮見和男著『聖書の使信4ルカによる福音書上』新教出版社、p.11、1991
- 5) 同上、p.11、
- 6) レギーネ・シントラー著、加藤善治、茂純子、上田哲世 訳『希望への教育2 子どもと祝うキリスト教の祭り』日本基督教団出版局、p.16、1995
- 7) 同上、p.24
- 8) 同上、p.23
- 9) 同上、pp.24-25

<参考文献>

- 1) 尾上明子、菊地伸二「絵本にみるクリスマス(2)－降誕物語を中心に－」『名古屋柳城短期大学研究紀要』No.18、pp.73-111、1996
- 2) 『聖書』新改訳
- 3) 柴田智世、尾上明子「キリスト教紙芝居における福音的観点からの考察－新約聖書を中心に－」『名古屋柳城短期大学紀要』No.36、pp.71-83、2014

A Study on Christian Kamishibai from an Evangelical Perspective —With a Focus on The Story of Christmas—

Onoe, Akiko*

Shibata, Tomoyo*

本研究では、キリスト教の福音紙芝居を保育に取り入れる際の一つの指針として、クリスマス物語の作品を取り上げ、聖書に基づいた内容の分析と、子どもに語る際の聖書からのメッセージの視点を示すことを目的として研究を行った。

その結果、クリスマス物語の聖書箇所である、マタイによる福音書、ルカによる福音書をベースにしつつ、登場人物や印象的な場面に焦点をおく等の、各作品の特徴が表れていた。聖書の話には忠実でありながらも、豊かなファンタジーを使って述べられている作品や、子どもが主人公の気持ちに感情移入できるような話の構成も見られた。課題としては、特にキリスト教主義の園においては、クリスマスの意義を子どもに伝えるとともに、紙芝居が有効に用いられることが望ましいと思われる。

キーワード：紙芝居、聖書、クリスマス物語、キリスト教

